SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

DECEMBER 20, 2013　No. 97

若鮎祭特集・夏の課外活動

第39回　「若鮎祭」を終えて

第65回　西日本医科学生総合体育大会

- 新任教員紹介
- 海外自主研修
- ヨット部による追悼慰霊式

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
SETA DAYORI
DECEMBER 20, 2013

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

DECEMBER 20, 2013

C O N T E N T S

メインテーマ：「若鮎祭特集・夏の課外活動」

トピックス

01 第39回「若鮎祭」を終えて　実行委員長　医学科第4学年　林　谷　俊　和
03 「若鮎祭」実行委員の感想
06 平成25年度　学生表彰
07 第65回　西日本医科学生総合体育大会

図書館からのお知らせ

08 Library Book Bazaar を開催しました！

キャンパスライフ

10 海外自主研修
ジョンズ・ホプキンス大学精神医学部門にて　医学科第4学年　池　田　朝　彦
ハワイでの自主研修を終えて　医学科第4学年　大　橋　瑞　紀
オタワ大学での海外自主研修（カナダ）　医学科第4学年　川　津　邦　裕
マレーシア国民大学における研修を終えて　医学科第4学年　渡　邊　摩　耶
ミシガン州立大学連合との交流協定に基づく研修に参加して　看護学科第4学年　山　本　萌　絵
20 平成25年度滋賀医科大学奨学金奨学生の決定
22 ヨット部による追悼慰霊式
2013年　嶋岡さん追悼慰霊式　医学科第3学年　ヨット部主将　礒　田　　翔

新任教員紹介

23 生化学・分子生物学講座（分子生理化学部門）　教　授　縣　　保　年
24 泌尿器科学講座　教　授　河　内　明　宏
25 社会医学講座（公衆衛生学部門）　准教授　藤　吉　　朗
26 動物生命科学研究センター　教　授　依　馬　正　次
27 生命科学講座（物理学）　教　授　目　良　　裕

国立病院機構　東近江総合医療センターだより

28 滋賀医科大学医学部第2教育病院としての「独立行政法人 国立病院機構東近江総合医療センター」の現況　総合外科学講座　教　授　来　見　良　誠
32 東近江総合医療センター外科の紹介　総合外科学講座　講　師　岡　内　　博
33 東近江総合医療センターでの研修　前期研修医　加　藤　寿　一
34 臨床実習の感想　医学科第5学年　勝　部　志　郎

インフォメーション

35 平成25年度第1回学位授与式
36 平成25年度滋賀医科大学医学部医学科第2年次後期学士編入学並びに平成25年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式
39 第39回　解剖体慰霊式
40 第3回男女共同参画推進のための講演会
平成25年度　研究動物慰霊式

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
SETA DAYORI

編集後記（宮松編集長）

トピックス

第39回「若鮎祭」を終えて

第39回若鮎祭実行委員会　委員長
医学科第4学年
林谷　俊和

第39回若鮎祭が終わってすでに1週間以上が経ちました。正直、学業はそっちのけで長い長い準備期間を経て作り上げた若鮎祭が終わってしまい、今まで通り普通に授業に出る生活に戻るとどこか寂しい思いがあります。

私が第39回若鮎祭の実行委員長をやることになったのは今年に入ってすぐの頃だったと思います。第38回実行委員会の先輩方や同級生の口車に上手く乗せられた、というのが実際のところで、最初は嫌で嫌で仕方ありませんでした。自分に学校全体の一大イベントをまとめあげる能力があるとは到底思えませんでしたし、自分が実行委員長になって果たして医学科4年生や看護学科2年生のみんなが協力してくれるのか、そんな人望が自分にあるとも思えなかったからです。学園祭が失敗したら自分のせいだな、そんなプレッシャーも感じていました。

第39回若鮎祭に向けて始動したのは今年2月の終わり頃でした。昨年の委員長であった岡野さんから実行委員長を引き継ぎ、副委員長、会計、局長、副局長といった学園祭準備のための中心メンバーを集め始めました。しかし実際のところは、準備といっても具体的に何をどうすればいいのか全く分からないままのスタートでした。実行委員長である私がそのような状態にも関わらず、声をかけると「一緒にがんばろう！」と言ってくれた実行委員会のメンバーには本当に感謝しています。みんなが積極的に協力してくれ、責任のある役職を快く引き受けてくれたことは、それまで後向きだった私の気持ちを前に向けてくれました。実行委員という仕事に不安を感じながらも、今までの若鮎祭に負けない素晴らしい学園祭にしたいという思いはみんなが共通して持っていたのではないかと思います。

今年のテーマを決めるとき、どんな若鮎祭にしたいのかを話し合いました。今まで部活に入っている人が中心になって参加していた若鮎祭を部活に入っていない人も楽しめるように、また内輪で楽しんでいた

若鮎祭を学外の人にも楽しんでもらえるように、そして今までの伝統を覆すような新しい若鮎祭にしたい、というのが実行委員の思いでした。そこで、医学科と看護学科の枠、学年の枠、部活動の枠、学内と学外の枠など私たちを取り巻く様々な枠（壁、限界）を壊し、若鮎祭をきっかけに新しくより良い関係を造っていこうという実行委員会の想いをこめて「壊造」を今年のテーマに決めました。今年の若鮎祭で少しでもこのような私たちの思いが実現できていればうれしい限りです。

若鮎祭の準備ではたくさんの困難がありました。お金の問題、先生からのご意見、連絡の行き違い、そして台風…具体的に挙げていたらきりがありません。しかし様々な問題が生じるたびに実行委員会で集まり、みんなの正直な思いをぶつけ合い、時には勇気のいる決断をし、前へと進んできました。問題が起こるたびに私は実行委員を中心とする同級生や看護学科2年生の今まで知らなかった良いところを発見し、尊敬することができました。

「壊造」というテーマを掲げた今年の若鮎祭ですが、何よりも壊され、新たに造りだされたのは私自身だったようにも思います。自分のキャパシティーを超えた役割を担うことは精神的にも肉体的にもきついものがありました。しかし、多くの仲間に支えられ、無事に第39回若鮎祭をむかえ、そして終えたとき、以前の自分より少しは成長できたような気がしました。私に実行委員長という役割を与えてくれ、同じ方向を向き、困難を支えてくれ、学園祭を成功に導いてくれた実行委員をはじめとする医学科4年生、看護学科2年生のみんなには感謝してもしきれません。

最後になりましたが、馬場学長、服部副学長、柏木病院長をはじめとする大学、病院の教職員の皆様、永田学生生活支援部門長をはじめとする学生生活支援部門の先生方、湖医会をはじめとするOB,OGの皆様、学生支援係の栗本さん、小西さんをはじめとする学生課の皆様、後援会の父母の方々、協賛してくださった企業の皆様、若鮎祭に参加してくださった方々、折に触れて私たちを気にかけてくださった前年度実行委員の皆様、多くの方々に支えられて今年も無事に若鮎祭を開催することができたことを厚く御礼申し上げます。

来年以降もますます若鮎祭が意義深く、楽しい学園祭になることを後輩たちに期待しています！！

「若鮎祭」実行委員の感想

会計　医学科第４学年　川津　邦裕

今年も若鮎祭を開催させていただき誠にありがとうございます。若鮎祭は学生が主体となり数々の催し物や企画を行っておりますが、それは表には決して出てこない多くの人に支えられて初めて可能となるものです。地域の皆様を初めとして、学内外の先生方、学生課、医師会、後援会、学生団体など多くの方々の援助により、学生数1000人程度の小規模な学校ながら総合大学に匹敵するような学園祭を開くことができました。本当にありがとうございました。

副委員長　医学科第４学年　高原　在良

若鮎祭では副委員長として林谷委員長のもとで働きました。「壊造」とテーマを掲げ、先生方や外部の方々からのご寄付をもとに委員長を中心として医学科4回生と看護学科2回生が協力し若鮎祭の基礎を造り上げ、そこへ他の学生が参加しお客さんに来て頂くことによって若鮎祭を開催することができました。もちろん執行部として働くのは楽ではなかったですし、台風の影響で開催できるかどうか不安になったりもしましたが、今は多くの方々のおかげで若鮎祭を開催することができたことに対する感謝の気持ちとその中心で働くことのできた幸せを感じています。

副委員長　医学科第４学年　村本　圭史

私は学園祭にはアカデミックな一面もある一方で、バカなことに全力をかけるイベントだと考えていました。オープニングムービーではドラマのパロディをするために無我夢中になって何日も徹夜で構成を考えたり、それでもアイデアはまとまらず、また徹夜して、気付いたころには学園祭前日に撮影して、当日にムービーが完成したりとそんなことばっかりしていました。そんな自分の無駄な作業に周りの人たちを振り回したり、迷惑をかけたりもしました。それでも自分自身で考えて、多くの人と協力して一つのものを作り上げ、それをまた多くの人に楽しんでもらい、それを見た人たちの喜ぶ顔を見た時に本当に幸せな気持ちなれるということを今回の学園祭で学びました。

ご寄付をくださった先生方、広告主の方々、実行委員会の仲間、ステージ局の仲間、ステージ業者の皆様、小西さん初め学生課の皆さん、部活の仲間、いろんな人達の協力があって今回の学園祭を成功させることができました。今は後輩たちに来年も素晴らしい学園祭にしてほしいという気持ちでいっぱいです。皆様、半年間ありがとうございました。

副委員長　医学科第４学年　山﨑　友莉

「壊造」をテーマに掲げ各局がアイディアを出し合い、改善を重ね今回の学園祭を作り上げました。今回執行部として学園祭全体を見るという立場になり、個々人の努力が組織として一つになっていく様子を見ることができ、そのエネルギーに圧倒されました。この若鮎祭を通して少しでも今までとは違う発見や交流が生まれることを目標としていましたが、学生も教員も地域の皆さんも、若鮎祭を楽しんでいただけたでしょうか?

広告局の会計として執行部から出向しましたが、その中で地域のクリニックや企業からの協力があって若鮎祭が成り立っていることを実感しました。また、当日は地域の方が家族で遊びに来られている様子を多く目にし、地域との交流の場になっている若鮎祭のよさが今後も引き継がれていってほしいと強く思いました。

副委員長として若鮎祭に関わることで多くの学びを得ることができました。委員長の林谷君、一緒に活動できた実行委員の皆に感謝しています。

副委員長　看護学科第２学年　奥山　詩雨

いつでも信頼のおける林谷委員長を支える“副委員長”のお仕事と、広報局長ちかさんと二人三脚で携わる会計を務めました運営の半年間が、無事に実を結び今日幕を閉じました。第39回若鮎祭のために多大なお力をくださったすべての皆様に感謝を申し上げます。

学園祭のパンフレット製作費は、一冊あたり150円。これは、お菓子に還元できる容易い価値ではありません。実際にこの一冊を一から生み出すことができたのは、各々でこの一言をプレゼントしてくださる方々がいたお蔭でした。「あなたは未来の医療者さんね。それでは滋賀医大の学生皆さんのために協賛致します。」　－　じりじりむしむしの8月猛暑、携帯を片手に黒スーツで突っ走り、OB・OGの先生方をはじめ、各企業・地域のお店1件あたりに何度も頭を下げて、寄付金のお願いに力を注ぎ込んだ広告局員の皆さんを私は忘れません。社会の厳しさを様々に身に受けながら、苦しくも汗水垂らしていただいた賜物となって、今年度も素晴らしい立派なパンフレットを広報部に捧げていただき本当にありがとうございました。

年に一度の滋賀医大のイベントとして、「今年度も当然のように築き上げるんだ」、「きっと楽しそう」などと、過酷な実態を何も知らずに、私は副委員長という責任の重い役目を引き受けました。今はとても反省致します。地元の皆様から漲るような大きな期待を受けていること、私たちはその方々のために日々医学に丹念することを心から認識し直しました。「あなたは人間味のある温かい医療者さんね。これからも私はあなたのお世話になりつづけたいですよ。」そう言っていただけるような滋賀医大生に私はなりたいです。

それでは、記念すべき第40回目の若鮎祭がさらに輝かしいものとなりますようにお祈り致します。

副委員長　看護学科第２学年　木村　佳子

あっという間に半年以上が過ぎてしまいました。第39回若鮎祭の執行部員として関わらせて頂いたことに深く感謝しています。

忙しすぎて目が回りそうになったこともありましたが、振り返ってみれば、一生に一度の貴重な経験ができたと思います。実行委員長をはじめ、実行委員会の皆様に助けて頂き、学生の皆様の協力を得て、最高の学園祭にできたことが本当に嬉しいです。自分一人で何かを達成しようとするより、大勢の人と一つの目標に向かって意見を交わし、より良いものに仕上げていこうとする喜びをいっぱい味合わせてもらいました。

台風の接近で開催が危ぶまれていたものの、何とかしてやろうという思いが台風の進路を曲げてくれたのではないかと思うほど、学園祭当日の天気は良かったですね。副実行委員長の一人としてたくさんの人と一緒に学園祭運営に関われてとても楽しかったです。

最後になりましたが、学園祭に関わって下さった皆様に感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

ステージ局局長　医学科第４学年　八重樫　悠

今年の若鮎祭はどうでしたか?今年のステージはどうでしたか?台風がドンピシャで直撃するという事態に見舞われ様々な変更もありましたが、大事もなく無事に終わることができて安心しております。今年のステージでは体育館でのステージ設営や音楽ライブ、イルミネーション、例年盛り上がるミスコンやKOEなどの目玉企画や局員が考えてくれた新しい企画などをやりました。来年、2年後、3年後になってあの年のステージではあんなことをしていたなと今年のことを思い出してくれたら、今年のステージは大成功です。本当に貴重な経験をすることができました。最後に一緒にステージ運営を考え、つくってくれた優秀な局員たち、多くの相談や無茶を聞いてくれた執行部のみんな、僕をステージ局局長に誘ってくれた林谷君には心から感謝しています。ありがとう!そしてステージを盛り上げてくれたみなさん、ありがとうございました!

企画局局長　医学科第４学年　津高　毬絵

若鮎祭を無事終えることができ、ほっとした気持ちでいっぱいです。台風で開催が危ぶまれましたが、入学以来経験したことのないほどの、快晴に恵まれた若鮎祭となりました。

企画局は講義室、食堂、武道場、駐車場など大学全体、講演会の大きく分けて5つの班に分かれて企画を立てていきました。班員のみんながそれぞれの企画の準備をしてくれ、当日はその準備が生き、予期せぬ問題が発生することはほとんどなかったと思います。両日ともハラハラして問題発生の連絡を待っていましたが、嬉しいことに暇を持て余す時間が多かったです。

局長を勤めさせていただいて思うことは、学生や来場者の方々が、我々の企画で楽しい時間を過ごしてもらえていたら何よりだということです。

最後になりましたが、班長をしてくれた大橋さん、中西さん、森くん、植村くん、増本さん、そして企画局の局員のみなさま、本当にありがとうございました！

広報局局長　医学科第４学年　田中　千賀

ようやく終わった～、と無事に若鮎祭を開催し、終了することができた充実感と安心感でいっぱいです。私は長という立場に就ける人間ではなく、最初からとても不安でした。でも、若鮎祭の準備を通して学んだことはたくさんあります。また、関わった人たちの今まで知らなかった一面を見ることができました。感情の起伏はありましたが、楽しく仕事をさせてもらえました。貴重な経験をさせてもらえてありがたかったと思っています。私にこんな役を下さってありがとうございました。

局員や関係各所で協力して下さったみなさま、私には気づくことができなかったけど縁の下で若鮎祭を支えてくださったみなさまに本当に感謝しています。皆さまのおかげで若鮎祭はステキなものになったと思います。本当にありがとうございました。

広告局局長　医学科第４学年　青柳　潤

2月に「広告局長を引き受けてくれないか」と委員長から打診を受けた時、本当に受諾すべきか1週間くらい悩みました。私事で恐縮ですが、家に帰ればまだまだ小さい子供たちが3人も待っていて学業との両立だけでも四苦八苦している中、果たして責務を果たせるかどうか、甚だ不安だったからです。それでも誘ってくれた委員長の真っ直ぐな目に可能性を感じ、不安を抱えたまま引き受けることにしました。その日以来この9か月間、皆様に迷惑をかけることも多々あったかと思いますが、どうにかこうにか、走りきり、成果を出すことが出来ました。地道な仕事も文句ひとつ言わずひたむきに取り組んでくれた広告局員の皆さんには、この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

そして何よりも、まだまだ若輩者の私たちの話を聞いてくださり、広告掲載をご快諾いただいた広告主の方々には、心より感謝いたします。皆様のご厚意に支えられてこその若鮎祭であることを決して忘れることなく、来年度の実行委員に引き継いでいきたいと思います。誠にありがとうございました。

総務局局長　医学科第４学年　沖　達也

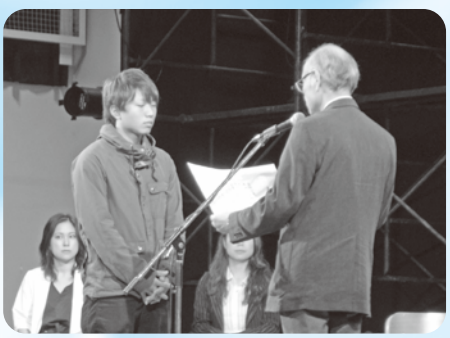
私は総務局局長という形で若鮎祭に関わらせて頂きました。今回の若鮎祭では、大型台風の接近という非常に稀なケースの対応に迫られ、どの局もその対応には苦労されたことと思いますが、私たち総務局もまた大変苦労致しました。総務局の仕事は裏方的な面が強く、物品班、衛生班、模擬店班、駐車場班それぞれが、ほぼ若鮎祭当日およびその前後の「実働部隊」として働くことがその主な仕事でした。そのため、台風接近の可能性がある以上、当日及び準備日の仕事に関しては台風の動きに応じた非常に柔軟な対応を必要とし、班員の皆様には多くのご迷惑をかけてしまいました。また、台風接近時の学生及び外部の模擬店準備のマニュアル作成、電力供給源の設置などに関して、他の局員・実行委員・学生課の方々には直前に多くのご相談をさせて頂き、急な変更等も多々お願い致しました。若鮎祭が迫るにしたがってそういった様々な問題が生じることとなり、多くの方々に相談・変更のお願いを致しましたが、その度に皆様が協力して下さり迅速な対応が出来たことで、私にとってはそれらの問題が不安となるよりむしろ、きっと今回の若鮎祭もしっかりと開催することが出来るだろうという自信となりました。結果として、万全の状態とは言い切れなかったかも知れませんが、何とか無事に若鮎祭を終えることが出来ました。これも、若鮎祭に関わって下さった全ての皆様のご協力あってのことと思います。本当にありがとうございました。

平成25年度　学生表彰

10月26日（土）、第39回若鮎祭開会式後に体育館特設ステージにおいて、滋賀医科大学学生表彰を挙行しました。

今回、馬場学長より表彰を受けられたのは、平成24年9月から平成25年8月までの間に優れた実績、評価を得た3つの個人及び団体です。また、表彰に先立ち、博士課程の大学院学生によるポスター発表会の評価結果に基づく「優秀ポスター賞」の授与が行われました。

受　賞　者	受　賞　理　由
医学科第６学年 **石田　瞳**	自主研修で行った実地調査を第53回日本社会医学会総会で報告し、その結果、学会奨励賞を受賞した。 また、調査結果を踏まえた論文が『社会医学研究（第31巻1号）』に掲載されることが決まっている。
平成24年度卒業生 **熊谷　麻子** （現医師臨床教育センター所属）	本学在学中に生化学・分子生物学講座にて研究に従事し、共著者の1人として論文完成に多大な貢献をした。 完成した論文は学術雑誌『NatureCommunications』に掲載された。
端艇部	第65回西日本医科学生総合体育大会 新人舵手付きフォア　　優勝



第65回　西日本医科学生総合体育大会

今年度の西日本医科学生総合体育大会（通称：西医体）は九州大学を主幹校として8月に開催されました。

今年度は個人種目等に8位以内の好成績が多くあったものの、団体種目での優勝が比較的少なかったのが影響したのか、総合成績は37位（全44校中）となりました。

来年度のさらなる活躍を期待したいと思います。

クラブ名	種　　目	成績（ベスト8以上）
バドミントン部	男子個人戦シングル	ベスト8　髙田　晋明
ヨット部	470級	2位　久住・礒田組
	スナイプ級	3位　成田・横川組
水泳	男子100m　バタフライ	2位　山本　大雅
	男子200m　個人メドレー	6位　山本　大雅
	男子200m　バタフライ	2位　吉田　耕輔
	男子800m　自由形	3位　吉田　耕輔
	女子200m　自由形	5位　中西　真由子
	女子400m　自由形	4位　中西　真由子
ボート部	新人男子舵手付きフォア	優勝
	一般男子舵手付きフォア	5位
	一般男子シングルスカル	3位
	「西日本コメディカル大会」シングルスカル	優勝
ハンドボール部		ベスト4
ソフトボール部		準優勝
陸上部	男子100mH	7位　入山　圭司
	男子200m	7位　大槻　晋士
	男子800m	5位　岡本　寛樹
	男子3000mSC	2位　脇坂　穂高
	男子5000m	5位　脇坂　穂高
	男子4×400mR	7位　大槻・岡本・酒井・松浦
	男子円盤投げ	7位　大石　健
	男子砲丸投げ	3位　林谷　俊和
	男子砲丸投げ	5位　大石　健
	男子やり投げ	5位　大石　健
	女子円盤投げ	7位　辻嶋　涼子
	女子やり投げ	6位　堺　淑恵

Library Book Bazaarを開催しました！

第39回若鮎祭（10/26-27）において、図書館で不要になった資料を無料でお譲りするLibrary Book Bazaarを開催しました！

昨年度に引き続き２度目の開催となった今回のバザールでは、基礎系の講座からの不要図書なども出品し、一般のお客様にも興味を持っていただけるようなバラエティに富んだラインナップとなりました。

台風一過で少し肌寒くなった中でしたが、皆さん熱心に本を選んでおられました。

Aera やNewton、日経サイエンスなどの雑誌は、昨年に引き続き根強い人気でした。

今年は土曜日のみの開催でしたが、出品した1,502点中**406点**と、だいたい昨年と同程度の資料を引き取っていただけました。

また、わかあゆ夢基金への協力をお願いしたところ

総額6,977円の寄付をいただきました！

ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

キャンパスライフ

海外自主研修

ジョンズ・ホプキンス大学精神医学部門にて

医学科第4学年 池田 朝彦

＜概要＞

2013年8月20日から9月20日の1か月間、米国ジョンズ・ホプキンス大学精神医学部門神谷篤研究室（以下「神谷ラボ」という。）にて夏期自主研修を行った。ハーバード大学、ペンシルベニア大学などとともに医学部門において全米屈指の規模・業績を誇る同大学にて数年前独立した神谷ラボでは、統合失調症、うつ病などの精神疾患の遺伝子面からの病因解明を目指している。以下今回の研修に至った背景、研修内容、総括及び今後の展望に分け、本研修の報告とする。（写真A）

写真A：Dr. KamiyaとPI（Principal investigator）室前にて

＜研修に至った背景＞

私は前大学で法学を専攻、国家公務員として数年間の勤務経験を経て、2011年秋に滋賀医科大学に編入学した。キャリアチェンジを思い立った理由の一つに精神医学に関心があること、また、かねてから留学を希望し、社会人時代より英語学習を継続してきたこともあり、当該海外派遣制度を知った編入学直後より精神医学部門における研究室である神谷ラボへの派遣を強く希望し準備を重ねてきた。

具体的には英語力の底上げ（TOEIC 930/990, TOEFL 95/120）、現地で必要とされる分子遺伝学的実験手技の予習（国内での研修先として分子遺伝医学小島秀人准教授（当時）の講座を選択）、背景知識の取得（神谷ラボの研究内容に関する論文の精読）などを積み、1か月間の研修に臨んだ。

＜基礎研究分野における研修内容＞

ラボ到着当日からすぐプロジェクトの一員として組み込まれ、研究に参画した。前半（8月20日から8月30日）、後半（9月2日から9月20日）、異なるBossのもと2プロジェクトに従事した。概要は以下の通り。

①前半：「DISC-1遺伝子と統合失調症プロジェクト」

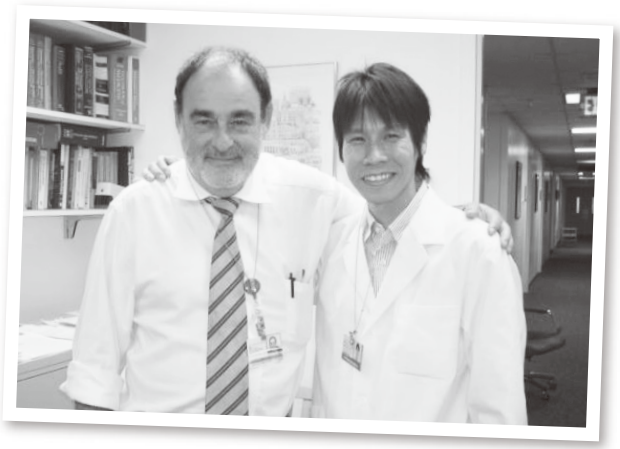
統合失調症の発症機序を、一原因遺伝子とみられているDISC-1の操作を通して解析を行うプロジェクト。Bossである Dr. Saitoからは一つ一つの研究手技にとどまらず、その背景を文字通り朝から晩まで、深夜までレクチャーしていただいた。

結果、genotyping（マウスの尾からDNAを抽出、目的とする遺伝子を持っているかの判定）、cloning（遺伝子操作に必要な特定のDNAを持つ大腸菌作成）, mini prep, maxi prep（当該大腸菌の増殖）, in utero electroporation（子宮内胎仔へのDNA打ち込み）の際のマウス縫合、injection（生まれた仔マウスへのGABAアゴニスト注射投与）といった手技を短期間で習得するとともに、一つ一つの手技の実験全体における位置づけを俯瞰することができた。（写真B）

②後半：「漢方薬とうつ病プロジェクト」

うつ病の発症機序を漢方薬の一成分を用い特定を図るプロジェクト。social defeat test（小マウスと大マウスを争わせ、小マウスにストレスを与える）、social interaction test（ストレス後の小マウスの行動変化を観察）、extraction（脳を取

写真B：仔マウスにGABAアゴニストを注射投与する筆者



写真C：Professor Geraldと面談後に

出しタンパク量を測定）と、研究の最初から最後まで全てを担うことができた。Bossである Dr. Kokiにはプライベートでも大変お世話になり、たびたびご家庭に訪問させていただいた。

＜臨床分野における研修内容＞

Dr. Kamiyaのご紹介のもと、臨床現場における研修の場も多く体験させていただいた。以下、特に印象的だった2点につき述べる。

①Teaching roundへの参加

米国版教授回診ともいうべきTeaching roundへ研修医数名とともに参加した。若手担当医が教授に現状報告したのち患者さんが入室、研修医が取り囲む構図。一人の患者さんに教授面談を二時間近くかけ現況を聞き取り、担当医の治療方針に加え、カウンセラーのような励ましをしていく姿が印象的であった。

②精神科教授との面談

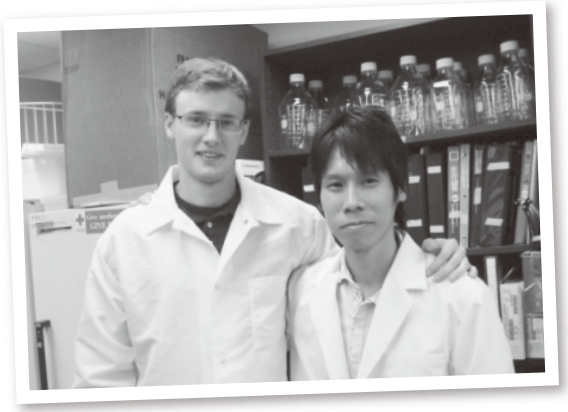
OCD（強迫性障害）を専門とするProfessor Gerald Nestadtと一対一で面談する機会をいただいた。自己紹介を兼ね研究室で取り組む上記2プロジェクト概要について説明、その後OCDの遺伝因子・環境因子や統合失調症との関連、精神科医の心得、アメリカ臨床研修などについて1時間ほどお話を伺った。関心を抱いているアメリカでのResidency, Fellowshipなど臨床研修の話題では「ぜひ実現を」と励ましの言葉をいただいた。（**写真C**）

＜総括及び今後の展望＞

参画した2プロジェクトにおいて、関連する手技やプロトコルを習得するとともに、それぞれが論文に、グラント獲得に、最終的には各疾患の発症メカニズム及び治療法解明にどのように結びついているのかについて俯瞰する目を養った。医学研究分野におけるいわば「アメリカ発ベンチャー企業」で日々奮闘する研究者の方々と協働し意見交換をし、その厳しさと達成感をほんの一部ではあるが、共有することができた。

また、長年の夢であった米国への留学を実現することができ、独学を続けてきた英語力もまだまだ不十分ながらも一定程度は通用することを確かめることができた。卒後の進路については未定ながら、米国臨床現場を体感するとともに現地教授との知遇を得られ、渡米前より学習を継続してきたUSMLE（米国医師国家試験）を在学中に合格する強い原動力となったと感じている。

最後に、このような素晴らしい機会を提供していただいた精神医学講座山田教授、金井講師、神谷ラボメンバーのDr. Kamiya, Dr. Saito, Dr. Koki, Mike, Atakanほか米国で出会った多くの方々、生化学・分子生物学講座小島准教授（当時）、端さん、渡米アドバイスをいただいた医学英語相浦教授、学生課林さん、財政面でのサポートをいただいた財団法人和仁会、そして東京で応援し続けてくれている両親に、この場を借りて心からの感謝の気持ちとお礼を申し上げ、当報告書の締めとしたい。（**写真D**）



写真D：Labo technician Mikeとラボにて

ハワイでの自主研修を終えて

医学科第4学年　大橋　瑞紀

ハワイは、米国の州の中で、最も平均寿命が長い州のひとつです。また、日本も世界的に平均寿命が長い国であるのは、ご存知の通りです。このような社会では、平均寿命だけでなく、健康寿命を延ばすことが、人々の本当の健康を追求するために必要であると感じました。そのため、日本と同じような状況にあり、かつ日系人が占める割合の多いハワイにおいて、人々が長く健康な生活を送るための研究や教育に関して学ぶことを通して、ハワイ、さらに日本の健康に関して考える機会が得られると思いました。以上が、日本人には観光地として馴染み深いハワイに、研修を目的に訪れようと思った理由です。

今回の研修では、John A. Burns School of Medicine（ハワイ大学医学部）のDr. Bradley WillcoxとDr. Kamal Masaki（両者ともハワイ大学医学部老年医学教授）にお世話になりました。様々なプログラムを訪問する機会のセッティングから、余暇のアレンジまで、盛り沢山のスケジュールを組んでくださり、毎日違う場所で、新しいことを学ぶことができました。

研修の拠点は、先生方の研究室があるKuakini Medical Centerでした。ここでは、ハワイ在住の日系人を対象にした、循環器疾患疫学研究として世界的に有名なHonolulu Heart Program（HHP）が行われています。なお、このHHPの日系人（およびその子供たちの世代）と日本人とを比較する研究が、滋賀医科大学公衆衛生学部門と共同で現在も行われており、その一つにERA-JUMP（Electron-Beam Tomography and Risk Assessment among Japanese and US Men in the Post World War II Birth Cohort）があります（詳しくは公衆衛生学教室のHPを参照ください）。そのため、ハワイ渡航前には公衆衛生学教室において、HHPとERA-JUMPに関して、理解を深めることができました。またハワイ渡航前後に、ERA-JUMPと関連して、日米における循環器疾患の現状、循環器疾患の危険因子に関して、文献や公的機関の調査結果およびハワイでの経験を基に、考察をしました。

お世話になったDr. Bradley WillcoxとDr. Kamal Masaki

HHPのスタッフと調査の擬似体験@Kuakini Medical Center

Kuakini Medical Centerでは、研究に関する講義を聞いたり、調査が行われているクリニックで調査の擬似体験をしたり、脳剖検を見学したりすることができました。HHPに関する論文を読むだけではわからない、厳密に規定された調査方法の実際の様子や、研究に携わる方々の研究に対する誇りを感じることができました。またKuakini Medical Centerは、研究だけでなく教育にも携わっており、研修医に対する老年医学のワークショップにも参加することができました。

次に印象に残っているのは、小学校の見学でした。まずお昼には、給食の試食と子ども達の給食の様子の見学、担当者へのインタビューをすることができました。夕方には別の小学校を訪問し、子ども達とその家族を対象にした、健康的な食習慣と運動習慣を促す健康教室に参加しました。調理の実演やダンスを行う等、大人も子どもも興味が持てる工夫がされていました。子ども達の肥満が問題視されるハワイにおいて、健康教室を開催する重要性と苦労を窺うことができました。

その他にも、ハワイ州最大の病院であり、ハワイ大学医学部の主な臨床研修病院でもあるQueen's Medical Centerでは、循環器内科の臨床現場を見学することができました。またハワイ

John A. Burns School of Medicineの施設の見学

Dr. Bradley Willcox、Dr. Craig Willcox、先生方の子ども達とディナー

Dr. Bradley WillcoxとDr. Craig Willcoxの執筆した本をいただきました

ハワイの自然に触れる機会も。写真は野生のカメ。

大学では、栄養学の講義を聴講したり、医学部の施設や研究の見学をしたりすることができました。ハワイの学生や医師の様子や、臨床、教育、研究が行われている現場を間近に見ることができました。また、沖縄出身の日系人のコミュニティにおいて、長寿に関するレクチャーを聞きながら、現地の日系人と交流する機会も得ることができました。ハワイで印象的だったのは、沖縄出身の日系人は、日本本土出身の日系人とは一線を画し、独自の文化やコミュニティを築いていることでした。

研修の他にも、アリゾナ記念館やプランテーションビレッジを訪れ歴史や文化を学んだり、ファーマーズマーケットやスーパーを巡って現地の生活を覗いたり、サーフィンやサンセットでビーチを満喫したり、空き時間がないくらい、充実した毎日を過ごすことができました。丘の上にあるDr. Bradley Willcoxのお宅に伺い、ご家族や友人と食事をしながら、ダイヤモンドヘッドとホノルルの夜景を一望することができたのは、とても優雅なひとときでした。

歴史的にも関係が深く、現在も交流が盛んなハワイと日本ですが、そのような背景を生かして、多くの研究者が人々の健康のために、ハワイと日本における共同研究を含む疫学研究に、日々励んでいます。日系人が多いハワイの特色を生かしたHHPのように、地域の特色を生かした研究は、他に類を見ない貴重な研究であると同時に、地域の人々に恩恵をもたらすと感じました。

今回、日本からハワイへたった2人の医学生が訪問するというだけで、日本でもハワイでも、ここには書ききれないくらいの、沢山の方々が指導やもてなしに時間を費やしてくださいました。本研修を実現してくださった三浦先生、研修期間中ご指導いただいた藤吉先生、現地でお世話になったDr. Bradley Willcox、Dr. Kamal Masakiをはじめとする先生方、現地で出会った全ての皆様に感謝を申し上げます。Mahalo ！

訪問した日の小学校の給食

小学校の給食の様子

ダンスをしながらの健康教室

オタワ大学での海外自主研修（カナダ）

医学科第4学年　川津　邦裕

大学生活4年目の夏にある自主研修という制度は、これまでにない大変自由度の高い制度です。私はこの機会を利用し、カナダの首都オタワにあるOttawa Hospital Research Institute（OHRI）で研修を行って参りました。カナダはネコの代わりにリスがいるような場所で、気温も8月中旬で最高20度という過ごしやすい国でした。

OHRIはオタワ大学医学部に隣接する研究施設で、主に医学・生命系に特化した研究が行われています。私がお世話になった研究室では、アルツハイマー病やパーキンソン病など老化に関わる病気の研究をしており、研究を担当しているPh.D.のグレイ先生と主に臨床的な分野を担当するPh.D./M.D.であるウルフ先生の二頭体制で研究が行われていました（灰色オオカミの絵がロゴマークです）。また丁度カナダでも夏休み中であることもあり、数人のポスドクや博士課程の学生の他に5人ほど学部生が研修にきていました（カナダの夏休みは4ヶ月だそうです！）。同世代の相手がいることは心強く、いつもランチを一緒に食べながら、カナダで流行っていることや向こうの学生が普段何をして過ごしているのか教わりました。

研修内容としては、細胞培養からtransfection、蛍光顕微鏡を用いた経時観察を軸に組織染色や電気泳動、果てはマウスを解剖して脊髄を取り出すことまで行いました。また研究所内を案内して頂き、キャンパスや病棟、動物センターの見学もさせて頂きました。カナダで唯一ネコを見たのがこの時です。

カナダで学んだことはやはり英語でしょうか。日本国内での英語はもとより、観光や発表・研究などに使う英語とも異なる、日常会話の英語を体験できたことは非常に有意義でした。勿論、日本においてもネイティブスピーカーと話す機会はありますが、ネイティブ同士の会話、それも同年代の学生の輪にいれてもらうにはやはり実際に海外にいってみて初めて可能だと思います。英語に関して一つ印象に残っていることがあります。ラボでは、他の国からのポスドクも多くおられ、普段は流暢にボスと会話をしていました。しかしふとある時、日本で買ったお土産の話になり、「あるものを買ったのだが、英語でなんというか分からない。」と言われました。そこで、その方は中国出身だったのでそのお土産を漢字で書いてもらうと、“人形”と書いたのです。つまり、英語を話す分にはネイティブ同然であるのに、単語力としては“doll”も知らないほどであったのです。この出来事は私にとって大きな衝撃で、自分のスピーキング力は単語で言うと“doll”にも達していないレベルである、ということをこの時はじめて実感したのです。

カナダでは人々は皆優しく、また英語・フランス語の二言語国家でもあるので、英語を第一言語としていない人への対応に慣れています。世界中から留学生が集まり、研究を学ぶ環境としても最適です。

新4年生の皆さんは、この機会にカナダを訪れてはいかがでしょうか。

道端にいたグレイホッグ

グレイ・ウルフ研のマグカップ

カナダ人アーティストによる作品

オタワ大学病院

現地学生と観光

ナイアガラの滝

マレーシア国民大学における研修を終えて

医学科第4学年　渡邊　摩耶

私はこの夏、海外自主研修でマレーシア国民大学医学部キャンパス（PPUKM）にある、Immunology & Virologyユニットで2週間の研修を行いました。私が海外自主研修先にマレーシアを選んだ理由は、異文化圏に滞在し現地の方と交流する貴重な機会だと考えたからです。マレーシアはイスラム教徒やヒンドゥー教徒、中華系の人々がともに暮らす多民族国家です。知識としてしかしらない他宗教について学ぶには、やはり現地に行くことが一番ではないかと考えました。旅行ではなく、海外自主研修という形をとったのは安全性が高いことと、現地の方と話をしなくてはならない環境に身を置きたいと考えたためです。

Immunology & Virologyユニットを選んだ理由は、第2病理学で研究されているような免疫学について学びたいと思ったからでした。免疫について学びたいと相談した結果、PPUKMにはこのようなユニットがあるからそこで研修する、という話になりました。実際現地に行ってみると、そこは日本における臨床検査部でした。海外に行かれる方は、事前に研修の内容についてできる限り具体的に英語で行いたい内容を伝えておくとよいと思います。

研修として最初の1週間はImmunologyユニットで実施されている各検査手技について学び、次の1週間はVirologyユニットや他のユニットの見学を行いました。ユニットの見学については希望する部署に行けたため、ここでもともと学びたかった免疫学のユニットに伺いました。どのユニットも淡々と業務を行うのではなく、

研修初日　スラマ・ハリ・ラヤにて

間にお茶をしたり雑談をしたりといった独特の風景があり、女性の働き方、宗教観・価値観などについて話を伺うことができました。さらに仲良くなった方の家に伺わせていただくこともできました。

また学外見学として、血液培地作成のために必要な牛の血液採取に同行させていただきました。これは月に一度行われている作業です。マレーシアの屠殺場では、各農場から送られてきた牛の首を切って殺し食肉処理を行います。この処理を受けた牛だけがハラルとして認定されます。血液採取は切られた牛の総頸動脈から噴き出す血液を瓶で回収します。血液を回収する瓶には抗凝固剤が入っており、これを大学まで持ち帰り培地を作成します。

観光において、私たちが行った時期は非常によく、3回スラマ・ハリ・ラヤに参加できました。これはイスラム歴における新年のお祝いです。ムスリムも他宗教も関係なく参加者には無料で

Immunology ユニットにて

HIV検査手技説明の様子

伝統的な食事が振る舞われます。8月31日にはマレーシア国民大学医学部医学科学生と共に独立記念日のパレードを見学しました。日本にはない独立記念日ですが、これに対して燃やされる情熱はすさまじく、ただただ圧倒されました。

マレーシア国民大学は2011年に滋賀医科大学と協定を結び、海外自主研修先に追加されました。私たちが初めての研修者ということもあり、様々な困難がありました。具体的には、宿泊先がちゃんと取れているのか分からない、大学のキャンパスは2つあるがどちらに行けばいいかわからない、朝行くべき場所がどの部屋かわからない、基本の会話は皆マレーシア語で分からず、英語もマレーシア語訛りで聞き取りにくく伝わりにくいことなどです。しかし、多くのマレーシアの方に助けられて、無事に研修を終えることができました。

この研修では何よりも人間の暖かさ、優しさに触れ、助けられました。知識がなく英語が不自由な私たちを絶えず心配し、様々な形でよき研修になるよう助けてくださったPPUKMの方々にはいくら感謝してもしきれません。また貴重な機会を与えてくださった滋賀医科大学、事前相談に何度も乗っていただいた相浦先生、一緒に過ごしてくれた同級生4人、本当にありがとうございました。

独立記念日パレード、
現地学生と共に

実験結果が無事にでて一安心

Bioengineeringユニット見学風景

屠殺場にて

スラマ・ハリ・ラヤ
みんなで民族衣装を着ました

ミシガン州立大学連合との交流協定に基づく研修に参加して

看護学科第4学年　山本　萌絵

ミシガン州立大学連合との交流協定に基づく研修は、毎年看護学科の4年生の希望者が参加している研修です。私も、「アメリカの医療・看護は日本とどこが違っているのだろう。」という疑問を抱いて今回の研修に参加することを決めました。今回の研修では、ミシガン州のイーストランシングにあるミシガン州立大学（Michigan State University, MSU）に行かせていただきました。研修期間中は大学内にある、MSU Japan Centerの職員の方が引率してくださいました。高度先進医療が受けられる大学病院から、在宅看護サービスまで幅広いプログラムを用意して下さり、アメリカでおこなわれている看護の片鱗に触れることができました。実際に自分の目で見て英語でお話しを聞いて、アメリカでの看護について学んだことによって、自分自身が持っていた看護に対する考え方を見つめ直すことができました。

イーストランシング近郊の看護大学（MSU College of Nursing と Lansing Community College）の見学では、アメリカの看護師がどのような教育プログラムで養成されるのか、ということを教えて頂きました。アメリカにはLPN、RN、MA、NPなど看護師の区分がいくつもあり、資格によって許可されている仕事がかなり違います。アメリカではひとりひとりが「自分はこんな看護師になりたい。」というビジョンを持って学校を選択しているため、それぞれの職場で生き生きと働くことができるそうです。看護大学の学生も「私はこんな看護師になりたい！」ということを話しており、この目的意識の高さは日本の看護学生も見習わないといけないなと思いました。また、ボランティアやディボーションは

Great Lakes Caring Hospice の職員さんと

して当然、というアメリカの考え方からか、看護学生の成績や評価に、ボランティアや看護助手の経験がポイント化されて加点されるそうです。講義や実習の合間を縫って、ほとんどの学生がボランティアをしているということにも感心させられました。

病院の見学では、私立病院Sparrow Hospitalと大学病院University of Michigan Hospitalに行きました。Sparrow Hospitalでは、一人の看護師に付いて業務を見学する実習を行いました。行われている看護としては日本と大きく違うところはあまりなく、患者に合わせて話すスピードを変えたり、「なにか今私がすべきことはありますか？」と退出時に尋ねたり、看護師の姿勢はアメリカも日本も同じなのだと感じました。一方で、役割分担が明確なところは、日本の『人のことまでやってあげようとする』姿勢とは違うな、と感じました。アメリカの病院では役割分担を明確にし、看護師や医師、様々な種類の看護助手が自分の職務を全うすることで、職員のストレスを最小限にしつつ、うまく病棟が回るように工夫されているのだな、と感じました。

Lansing Community College
救急車の実習用に、部屋の中に救急車があります。

MSU College of Nursing
心拍・呼吸などが設定できる人形

Sparrow Hospitalの廊下

University of Michigan Hospital

University of Michigan Hospitalは、1万7,000人もの職員が働いている大きな病院です。案内してくださったのは病院の通訳の方で、病院内に8か国語の通訳が常勤していることや、月6,000件の通訳依頼があることを教えていただきました。日本の病院に常勤で通訳がいることは珍しいと思いますが、様々な言語圏の方が集まるアメリカでは必要不可欠なサービスなのだな、と思いました。

地域医療の見学では、訪問看護、診療所、高齢者福祉施設に行きました。

Great Lakes Caring Hospiceは、ホスピスという名前ですが、訪問看護の事務所のような施設でした。アメリカは日本よりも平均在院日数が短いこともあり、在宅型ケアのシステムが発達しています。日本も2025年問題など、平均在院日数を短くするために在宅型ケアを発達させていかなければならない状況にあります。アメリカにおける在宅医療について学べたことは、『患者は患者である前に生活者である』という視点を再確認するきっかけになりました。春から看護師として働くにあたり、この視点を忘れない看護をしたいと思いました。

University of Michigan Family Health Programは、ミシガン大学の中にある日本語が話せる医師・看護師がいる診療所です。ここでは一般診療のほかに、病気になった時の日本語電話相談や日本企業の人間ドックの実施、看護師外来での相談・教育、予防接種、大学病院と在宅のパイプ役などが行われていました。日本人は何かあるとすぐに病院に行きますが、アメリカの医療制度では医療費がかかりすぎてしまうため、診療前にまずは電話で相談してもらって医療費を抑えるということが不可欠だということでした。

Burcham Hillsは、いわゆる有料の老人ホームと呼ばれる施設で、高齢者が快適に生活していけるような工夫が凝らされています。お金を払える人には手厚いサービスが用意されている、というアメリカの仕組みを改めて感じました。

海外研修は、海外の看護を学べるのはもちろん、自分の学んできた看護を見つめ直す良い機会になりました。アメリカと日本には様々な違いがありますが、それぞれの国のニーズに合わせて看護は柔軟に発展してきたのだと思います。看護の根本は同じであることを再認識し、自分が看護師としてどうありたいかを考えることができた今回の研修は非常に有意義なものでした。お世話になった先生方、Japan Centerの皆さん、各施設の皆様本当にありがとうございました。

お世話になった人たち

University of Michigan Hospitalの病室

平成25年度滋賀医科大学奨学金奨学生の決定

滋賀医科大学奨学金は、前年度の成績が優秀な第2学年以上の学部学生を各学科各学年から1名ずつ選出し、月額5万円の奨学金を1年間給付しているもので、企業、病院、個人からの寄附を財源（わかあゆ夢基金等）としています。

平成25年度の奨学生は以下のとおり決定し、去る7月26日にクリエイティブモチベーションセンターにおいて授与式を行いました。

平成25年度滋賀医科大学奨学金奨学生

医学科第2学年	五島　隆太	医学科第6学年	茶谷　元晴
医学科第3学年	門間　美里	看護学科第2学年	野津　瑛未奈
医学科第4学年	手塚　純子	看護学科第3学年	中野　琴奈
医学科第5学年	田村　亮太	看護学科第4学年	清原　麻衣子

奨学生からのひとこと

医学科第2学年　五島　隆太

滋賀医科大学で医学を学ぶ機会に恵まれただけでなく、このような援助をしていただけることに大変感謝しています。
奨学生の名に恥じぬように友人と切磋琢磨して、ますます勉学に励みたく思います。
最後に、このような機会に恵まれたのはいつも支えてくれた家族をはじめ、指導してくださった先生方、また、心の支えとなる友人たちの存在が大きかったと実感しています。今もう一度彼らに感謝の意を示したく存じます。本当にありがとうございました。

医学科第3学年　門間　美里

この度は奨学生にご選出いただきありがとうございました。
この制度は他大学にはみられない滋賀医科大学独自のものであり、大学が学生の教育を重視しているという表れだと思います。私が奨学生になることができたのは、滋賀医科大学の充実した教育制度と素晴らしい先生方のおかげです。
今後は勉学だけでなく、地域の活動に参加する機会を増やし、人間力のある医師を目指して頑張っていきたいと思います。

医学科第4学年　手塚　純子

大変有り難く思います。丁寧にご指導くださった先生方、わからないところを教えてくれたり、いやな顔一つせず資料を貸してくれたりした同級生のみなさま、様々なアドバイスを残して下さった先輩方、学生生活を支えて下さった職員の皆様に、深く感謝します。
今の気持ちを忘れることなく、頂いたご恩を将来お返しできるよう、これからも自分を磨いていきたいと思います。ありがとうございました。

医学科第5学年　田村　亮太

この度、奨学生に選ばれたことを大変光栄に思います。
少しプレッシャーは感じますが、今までの勉強の努力を評価していただいたということは嬉しく思います。またいつも支えてくれる両親や大学の先生方、友人に感謝しています。
今年からは病院での実習も始まり、医療の現場を見たり患者さんに接したりする中で、より一層医学へのモチベーションは高くなりました。そして、社会へ出るという自覚も感じるようになりました。これからは身につけた知識を実践できるように努力し、また、勉強のみならず、様々なことに挑戦していけたらと思います。

医学科第6学年　茶谷　元晴

この度は平成25年度の滋賀医科大学奨学生として選出していただき、ありがとうございます。昨年は座学を離れて初めて臨床実習に臨んだわけですが、今でもその時の緊張感を覚えています。1年が経過し、知識的にも、経験的にも昨年の自分自身より成長することができたのではないかと思います。
学内におけるアドバンスの臨床実習も残りわずかの期間となった今、改めてこの1年を振り返って思うのは、本当に様々な方々に指導していただき、支えていただいたということに尽きると思います。考え方や姿勢を学びとることのできる良き指導者に加えて、知識を共有することのできる同期の友人にも恵まれました。
大学生活も残りわずかとなりましたが、医学に対する「情熱」を忘れず、さらなる努力を重ねて自分自身を磨いていきたいと思います。これからも変わらぬご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。

看護学科第2学年　野津　瑛未奈

この度、奨学生に選んでいただき、大変感謝致しております。また、責任も感じております。
滋賀医科大学に入学して、学ぶことが本当に楽しくなりました。自分の納得のいくまで学べる環境に身を置かせていただけるのは大変ありがたいことです。入学以来、常に両親への感謝を忘れず自分と戦ってきました。
今回奨学生に選んでいただけたのは、学生を精一杯育てたいという熱い思いを持っていらっしゃる先生方をはじめ、学生生活を支えてくださっている大学職員の方々、大変面倒見の良い先輩方、支えあえる友人たち、共に学んで笑いあえる看護学科2年生全員、そして家族のおかげです。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。
今日から、また新たな気持ちでスタートを切り、初心を忘れず、患者さんのためにできることは何かを問い続け、日々精進していきたいと思います。
改めまして、この度は誠にありがとうございます。

看護学科第3学年　中野　琴奈

1年間自分なりに頑張ってきたことをこのように評価していただき、大変嬉しく光栄に思います。またこれを励みに、日々精進していきたいと思います。本当にありがとうございました。

看護学科第4学年　清原　麻衣子

この度は奨学生に選んでいただき、驚きとともに大変光栄に思います。
これまでの三年間、多くの先生方にお世話になりながら、講義や演習を通して成長させていただきました。また、臨床看護学実習では、実習中に受け持たせていただいた患者さんをはじめ、ご指導いただいた病院関係者様、看護学科の先生方、そして一緒に切磋琢磨しながら実習を乗り越えた友人達、家族など多くの方々に支えていただきながら、多くの学びを得ることができました。
このような恵まれた環境で勉強させていただいたからこそ、今回のような勉学の成果につながったのだと思います。学生生活も残りわずかとなりましたが、患者さんに安心を感じてもらえるような看護師となれるように、より一層の向上心をもって努力を続けていきたいと思います。ありがとうございました。

ヨット部による追悼慰霊式

本学ヨット部は、去る平成4年9月11日（金）午後4時50分に琵琶湖で不幸にも遭難した故嶋岡秀典さんの慰霊式を、9月8日（日）の11時からクリエイティブモチベーションセンターで行いました。

嶋岡さんの御家族、馬場学長、ヨット部OBといった関係者約40名の列席があり、大学関係者の追悼の言葉が述べられた後、ヨット部主将の医学科3年 礒田翔君から、部活の安全対策に対する誓いの言葉がありました。

2013年 嶋岡さん追悼慰霊式

医学科第3学年　ヨット部主将　礒田　翔

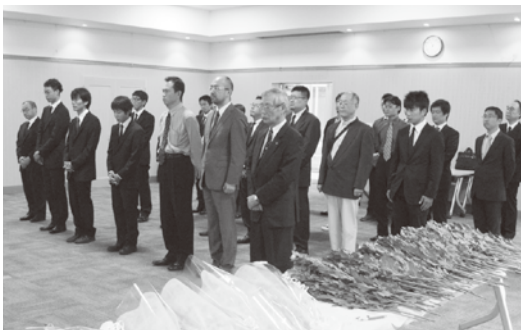
この追悼式は、ちょうど滋賀医大ヨット部が代替わりをして、新体制が開始された頃に行われます。だからこそ、この追悼式は私達現役のヨット部員にとって、嶋岡さんの追善供養をさせていただく式であると同時に、これから無事故で安全に部活動をしていくのだという誓いをもう一度新たに心深く立てる場でもあります。先日も安全に部活動を行うため、安全対策の講習会を部内で行いましたが、それで終わりとするのではなく、今ある安全対策をより良いものとして行くため、これからも安全対策について部内で協議してより安全な体制整えて行くつもりです。

また安全に気を配ると同時にヨット部を良い部活にして行くことも嶋岡さんの追善供養になると私は思います。私がヨット部に入部したのは、試乗会に参加して、ヨットに乗ったときに味わった爽快さと部員の皆が仲良く雰囲気が良く「ヨット部は自分が自分でいられる場所」だと感じたからです。

ヨット部をそのような内外ともに「素敵な部活だ」と思われるようにしていきますとお誓い申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

馬場学長による追悼の言葉



追悼慰霊式の様子

列席者による献花

新任教員紹介

生化学・分子生物学講座
（分子生理化学部門）

教　授

縣　　保　年

平成25年7月1日付けで生化学・分子生物学講座（分子生理化学部門）の教授を拝命致しました。微力ではありますが、本学の発展に少しでも貢献できるよう、教育と研究に努力してまいりたいと思います。

私は金沢大学医学部を卒業した後、京都大学医学部大学院に入学し本庶　佑教授のもと、PD-1という遺伝子の単離と解析を行いました。大学院修了後、京都大学遺伝子実験施設で転写制御の研究を開始しましたが、ちょうどその当時、ヒストンのアセチル化が転写の活性化に関わることが明らかになり、今でいうエピジェネティックな遺伝子発現制御の研究がはじめられた頃でした。そこで私は、抗原受容体遺伝子の再構成を対象に解析を行い、ヒストンのアセチル化がクロマチンをオープンにすることを明らかにすることができました。

その後、遺伝子再構成において中心的な役割を果たすE2AというHLH転写因子について研究されていたUCSDのCornelis Murre博士のもとに留学しました。留学先では、機能的な組換えが片方の染色体に限って起こる対立遺伝子排除という現象の解明に挑戦しました。これは非常に難しい問題で苦労しましたが、帰国後も粘り強く解析を続け、E2Aによるエピジェネティックな制御機構を明らかにすることができました。さらにE2Aが染色体の高次構造変化によっても組換えを誘導することを見出しており、今後はその分子機構の解明へと発展させていきたいと考えています。

最近、私が大学院で研究に関与したPD-1に対する抗体が、様々な癌に治療効果があることがわかり、多くの製薬会社が臨床治験にしのぎを削っています。PD-1はT細胞の活性化を抑制する膜蛋白ですが、癌細胞はPD-1のリガンドを発現し、PD-1と結合することでT細胞を抑制するようです。PD-1抗体はその結合を阻害し、癌細胞への免疫反応が起こると考えられています。

このことを聞いた当初は、どこか他人事のように感じていたのですが、時間がたつにつれ、もし本当にPD-1抗体が薬となって人のためになる日が来たら、これは研究者冥利につきることではないかと思うようになりました。しかしながら、PD-1遺伝子の単離と抗体の作製に関わることができたとはいえ、PD-1抗体が癌に効くことを私自身が見つけたわけではないので、本当の達成感が得られたわけではありません。院生やポスドクとは違い、研究室を担当する立場になり、一貫して研究に関与してはじめて本当の達成感を得ることができるといえるのかも知れません。

このたび、本学生化学・分子生物学講座を担当する機会をいただきましたので、ぜひともそのような達成感を得られるような研究を展開できるよう努力してまいりたいと思います。そのためにも基礎系の先生方はもちろん、臨床系の先生方からも御支援をいただきながら、研究を進めさせていただければと存じます。なにとぞ御指導、御鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

経歴

1990年 3月	金沢大学医学部医学科卒業
1994年 3月	京都大学大学院医学研究科博士課程修了
1994年 4月	京都大学遺伝子実験施設 助手
2000年 9月	カリフォルニア大学サンディエゴ校に留学
2003年 4月	京都大学大学院医学研究科 先端領域融合医学研究機構 科学技術振興助教授
2007年 4月	大阪府立母子保健総合医療センター研究所 主任研究員
2008年 4月	京都大学大学院医学研究科 感染免疫学講座免疫細胞生物学 助教
2009年 4月	同 准教授
2013年 7月	滋賀医科大学生化学・分子生物学講座（分子生理化学部門）教授

泌尿器科学講座

教　授

河　内　明　宏

平成25年8月1日付けで、泌尿器科学講座教授を拝命いたしました。滋賀医科大学の発展に貢献できるように努力をしてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

私は京都府立医科大学を卒業後、泌尿器科に入局し、その後のキャリアのほとんどを隣の京都で過ごしてまいりました。このため、滋賀は最も近い場所でしたので、最も多く訪れた県となります。学生のころはスキーや水泳、その後は家族や友人とバーベキューやサイクリングなど、素晴らしい環境を楽しませていただきました。仕事においても関連の施設がいくつかあったため、週1回程度はお邪魔させていただいておりました。また、学会の企画で琵琶湖遊覧を行ったことも懐かしい思い出です。このような最も親近感のある滋賀で皆様と一緒に働けることを大変うれしく思っています。

泌尿器科は副腎、尿路、男性生殖器を扱う科ですが、私はこの領域の先進・先端医療の開発を中心に、診療、研究を行ってまいりました。腹腔鏡手術や癌の局所療法などにおいて、6つの先進医療を厚労省に申請し、認可されてきました。このうち、腹腔鏡下膀胱内手術は私が日本で最初に行い、先進医療から健康保険収載されました。また、本年5月より泌尿器科で行っておりますロボット手術も、現在は前立腺全摘術のみが保険収載されていますが、今後多くの科の手術に応用されていくと思います。このような領域におきましては、少しでも皆様のお役に立てることがあると思いますので、よろしくお願い申し上げます。

教育面においては、腹腔鏡技術の教育に携わってまいりました。各科の領域で行われています腹腔鏡技術認定制度の泌尿器科領域の核審査員として、制度を立ち上げ、審査基準を制定し、審査員を選任し、実際の審査を行うという任務を果たすとともに、安全な腹腔鏡手術が普及するように学会員に対し教育を行ってまいりました。このような経験をもとに、本学においても安全で患者さんにやさしい手術の指導、教育を行っていきたいと思います。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

経歴

1984年 3月	京都府立医科大学医学部卒業
1984年 5月	京都府立医科大学附属病院研修医、泌尿器科勤務
1989年 3月	京都府立医科大学大学院医学研究科博士課程修了
1989年 4月	国立舞鶴病院 医師
1990年 4月	京都府立医科大学附属病院 修練医
1991年 1月	名古屋泌尿器科病院 副院長
1991年10月	京都府立医科大学医学部 助手
1998年 2月	京都府立医科大学医学部 講師
2003年 4月	京都府立医科大学大学院泌尿器機能再生外科学 助教授
2007年 4月	京都府立医科大学大学院泌尿器外科学 准教授
2013年 8月	滋賀医科大学泌尿器科学講座 教授

社会医学講座
（公衆衛生学部門）

准　教　授
藤　吉　　朗

平成25年8月1日付けで社会医学講座公衆衛生学部門の准教授に就任しました。

母校の岡山大学医学部を卒業後、私は大学に属さず市中病院で一般内科医として勤務していました。今でいう「予防医学」的な医療を修めたいと思っていたのですが、その当時はそのような医学分野を本気で探すだけの根性も余裕もない状況でした。

しかし、その後いろんな縁で米国ハワイ大学内科臨床研修（3年間）を修了し、「予防医学」のフェローシップを専攻することができました。フェローシップではMaster of Public Health（公衆衛生学修士）の取得が義務付けられており、その時に疫学という学問に出会い、特にヒト集団を観察し疾病の予防に資する知見を提供してきたコホート研究の成果と、その成果が臨床医学に与えてきた影響の大きさを初めて認識したのがこの時期でした。まさに「自分の道を見つけた！」という思いでした。フェローシップ修了後に帰国し、本学公衆衛生学部門（当時の名称は「福祉保健医学部門」。教授は現在アジア疫学研究センター特任教授の上島弘嗣先生）の大学院生として本格的に循環器疫学を学びました。そして、現在の三浦克之教授のご指導のもとさらに経験を積ませていただき、今日に至っています。

学生時代は医学部バスケットボール部に所属し、レギュラーにはなれなかったのですが自分なりに一生懸命努力しました。その当時から滋賀医大も強豪校で、我々の岡山大チームと仲良くしていました。私が5年生の時に岡山大は西医体で優勝し、東西の上位校による試合（全医体）に出場しました。その際に滋賀医大チームと“夢の”代々木第二体育館（バスケット・プレイヤーにとっての「甲子園」的存在です）で試合前の練習をすごく楽しくやった経験を今でも覚えています。その頃は滋賀医大の教員になるとは夢にも思いませんでした。

私たちの教室で行っている疫学研究は、非常に間口の広い研究であるとともに、「学際的」な学問だと思います。さまざまな分野（疫学、医療統計学、臨床および基礎医学、栄養学、運動科学、看護学、社会学など）の人間が知識を持ち寄り協力しあうことで、しっかりとした仕事が成り立っていくというイメージです。実際に、当教室での仕事も公衆衛生学部門だけではなく学内・学外のさまざまな部門・施設との共同で行っているものであることがそれを裏付けています。また、疾病の発症・自然経過を観察するというコホート研究の性質上、一般の方々（コホート対象者）や医療施設のご協力はもちろん、目的に必要な情報を収集・長期追跡していく地道な仕事がないと成立しない学問でもあります。

さて、関係方面のご尽力のおかげで本年10月に、本邦初の疫学研究に特化した研究施設「アジア疫学研究センター」が開所し、さらに文部科学省研究拠点形成費等補助金（リーディング大学院構築事業費）として「アジア非感染性疾患超克プロジェクト」としての大学院改組プロジェクトが採択されました。このような状況の中で私たちの部門の役割の重さをひしひしと感じるとともに、他分野の先生方・スタッフ・学生の皆さんとも知恵と知識を持ち寄り、滋賀医大をより魅力と活力ある大学に進化させるために、微力でもお役に立てればと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

経歴

1991年 3月	岡山大学医学部卒業
1992年 6月	岸和田徳洲会病院など勤務（内科）
2000年 4月	在沖縄米国海軍病院（シニア・インターン）
2002年 4月	ハワイ大学臨床内科研修（レジデント）
2005年 7月	メイヨー・クリニック予防医学フェロー
2007年 2月	ミネソタ大学公衆衛生学部卒業（公衆衛生学修士）
2009年 7月	滋賀医科大学社会医学講座 特任助教
2011年 3月	滋賀医科大学大学院修了（医学博士）
2012年 5月	滋賀医科大学社会医学講座（公衆衛生学部門）特任講師
2013年 8月	滋賀医科大学社会医学講座（公衆衛生学部門）准教授

動物生命科学研究センター

教　授

依　馬　正　次

平成25年9月1日付けで、動物生命科学研究センターの教授を拝命致しました。私の生まれは岐阜県岐阜市ですが、滋賀の地を踏みましたのは、面接の時が初めてです。これからは滋賀を第二の故郷とし、研究や大学運営に最大限尽力していく所存です。

私は、東北大学理学部を卒業後、同大大学院（藤井義明教授）に進学し、内分泌撹乱ホルモンによる薬物代謝酵素の遺伝子発現機構の研究や、低酸素による遺伝子発現制御の研究に従事しました。その9年間、週末も含めて研究三昧の日々を過ごしました。その後私は、トロントのRossant博士の研究室に留学し、血管形成の研究を行いました。随分研究に時間を割きましたが、凍った池の上でポスドクや学生達とアイスホッケーを楽しんだのは良い思い出です。この時代に、一生の友人達が出来たのはかけがえの無いことだった、と今では思います。研究を通して様々な国の人たちと友達になっていくことを楽しむのと同時に、人とコミュニケーションを積極的に図るということが自身の研究の進展自体に重要であることも認識させられました。今でも、論文を読み、研究テーマを考え、実験室で研究したりすることと並んで、学会やセミナーの会場で自身の研究を紹介し、新しい人に出会っていくことがとても重要であると認識しています。

帰国後、筑波大学基礎医学系解剖学・発生学教室（高橋智教授）の講師として教育および研究に従事しました。教育は、医学生への組織学総論部分、人体発生学の講義を担当しました。理学系大学院を卒業した私には、一から学ぶべき事が多く有りましたが、正常の人体構造がいかに先天異常の理解に役立つのか理解することは楽しい事でした。研究は、高橋教授から「何を研究しても良い」と言われたため教授のテーマはやらず、研究費を自分で稼ぎ、好きな研究を行いました。自身で選んだテーマであったため、つまらない研究をしても全て自身の責任というプレッシャーを感じながら研究に勤しみました。同時期に、所属研究室が動物センターの遺伝子改変マウスの作製部門の管理・運営を行なっていた関係で、遺伝子改変ベクターの効率的な構築手法を立ち上げるなど、その管理に寄与しました。結局、この動物センターでの経験があって、この度拝命することになったのだと思います。

これまで自分が歩いてきた研究の道を振り返ると、46歳にして漸く教授職を拝命するまでに、多数の職に応募し、面接を受け、落ち続けてきました。私が任期のない職に就いたのは44歳の時が最初です。それまでは任期付の職を乗り継いで来たわけですから、博士号を得てから実に17年間もの長期間ワインディングロードを歩きながら、やっとこさ教授職に辿り着いたというのが実際のところです。今後私に出来る事は、これからワインディングロードを歩いてくる若手の研究者達に、少しでも研究の楽しさとともに歩き方を伝えていくことです。

今後は他の研究者と共同研究を精力的に進めることで、自身の研究を推進するのはもちろんのこと、学内外の研究者の研究支援を行なっていく所存です。皆様には今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

経歴

1991年 3月	東北大学理学部卒業
1996年 3月	東北大学大学院理学研究科博士課程修了
1996年 4月	東北大学大学院（日本学術振興会特別研究員（PD））（藤井義明教授）
1998年11月	カナダ マウントサイナイ病院 ポストドクトラルフェロー
2002年 9月	筑波大学基礎医学系 解剖学・発生学教室 講師
2007年 4月	経済産業省ー新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）プロジェクト 研究員
2008年 1月	筑波大学基礎医学系 解剖学・発生学教室 講師（復職）
2009年 9月	さきがけ「iPS細胞と生命機能」5年型研究員（兼任）
2012年 8月	筑波大学医学医療系 解剖学・発生学教室 准教授
2013年 9月	滋賀医科大学 動物生命科学研究センター 教授

生命科学講座
（物理学）

教　授
目　良　　裕

2013年9月1日付けで、滋賀医科大学生命科学講座（物理学）教授に着任いたしました。

私は東京大学工学部物理工学科を卒業後、大学院に進学し、博士課程の途中で助手に採用されました。当時の研究テーマは、半導体などの物質中に欠陥、すなわち結晶秩序の乱れた箇所が存在すると、その物性がどのような影響を受けるか、というものでしたが、その後、研究を原子レベルで行う必要が出てきたため、その頃発明されたばかりの新技術で、物質表面の原子が目で見えるかのように観察できる顕微鏡である走査プローブ顕微鏡という装置を主に手掛けるようになりました。

この装置を用いて、ナノ物質と呼ばれる1mmの百万分の一程度の大きさしかない物質を、その場で観察しながら原子レベルで構造を制御・改変し、その性質を探る、という研究や、走査プローブ顕微鏡と光学的な分光法を組み合わせた、新しい測定方法や装置の開発研究など、物性分野での実験的研究を行ってきました。これらの研究は、次世代機能素子や新機能物質の開発を目指したもので、今後も大きく発展する可能性がある分野だと考えています。また、これまでの研究経過から、ナノ物質、表面改質、装置開発などの分野に知識を持っておりますので、この経験を生かせるテーマで医学系の先生方と共同研究を進めて行ければうれしいと思っております。

教育面では、東京大学着任以来、一貫して学部学生の物理実験教育に携わってまいりました。この度は医学生に物理を教える立場になりましたが、先端技術を利用した診断装置や医療装置が近年数多く用いられるようになってきている状況から、医学生が物理学の基礎をきちんと身につけることは非常に重要だと考えております。物理を身につけるには自分で考え納得することが一番の方法です。そのために、学生たちに出来るだけ興味を持ってもらい、自ら思考し、理解する、という経験ができるような講義を行っていきたいと思います。

今後は教育、研究に全力で取り組み、滋賀医科大学の発展に少しでも貢献できればと考えております。皆様方のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

経歴

1985年 3月　東京大学工学部卒業
1987年 3月　東京大学大学院修士課程修了
1989年 5月　東京大学大学院博士課程中退
1989年 6月　東京大学工学部 助手
2007年 4月　東京大学大学院 助教
2012年 3月　東京大学大学院 特任講師
2013年 9月　滋賀医科大学医学部生命科学講座（物理学）教授

国立病院機構
東近江総合医療
センターだより

滋賀医科大学医学部第２教育病院としての「独立行政法人 国立病院機構 東近江総合医療センター」の現況

滋賀医科大学総合外科学講座　教授
来　見　良　誠
（東近江総合医療センター　副院長）

「独立行政法人国立病院機構東近江総合医療センター」は、東近江市の中心部から東方約4㎞にあり、その昔近江商人が鈴鹿峠を越えて伊勢に行商した八風街道（国道421号線）に面し、名神高速道路八日市ICに隣接しています。名神高速道路を利用することによって、滋賀医大へは約30分、京都市中心部へ約1時間、大阪・名古屋の中心部へそれぞれ約1時間半の距離にあります。周辺の環境としては、鈴鹿山脈が近く、車で少し行けば山や川などの豊富な自然があり、キャンプ場なども整備されております。また、少し足をのばせば琵琶湖は言うまでもなく、日本海の海水浴場や滋賀県北部のスキー場なども日帰り圏内です。東近江市は琵琶湖と三重県に隣接する唯一の市で、人口は11万5千人で県下4番目の人口を有しています。このような地理的環境の中で、中規模の公的3医療機関では地域医療の再生が困難であると判断し、公的医療機関の機能分化を進め、東近江総合医療センターを中核病院とする医療圏の整備を現在進めているところであります。

大規模防災訓練の開催

東近江総合医療センターは、本年5月に新病棟が完成し320床に増床されました。また、当センターの駐車場に隣接する東近江市休日診療所も9月に開設され、医師会の定例会やそれに関連する「三方よし研究会」も、当センターの会議室で開催されるようになり、まさに地域の中核病院としての機能を果たすようになってきました。この2年間で200床増床してまいりましたが、その増床にともない防災に対する危機管理意識を向上させるために、9月18日には消防訓練を行い、“早く知らせる”、“早く消す”、“早く逃がす”の病院における消防の3原則の徹底を図り、さらに大規模災害への対応もできるように10月27日には、DMAT（Disaster Medical Assistance Team）の参加を含めた第1回目の大規模災害時対策の訓練も行いました。200名収容の会議室（通称：きらめきホール）が新病棟2階にあり、災害時の

避難施設・対策本部として活用できるようになっています。

新病棟の紹介

新病棟には多くの個室が整備されており、高層階からの眺望は、南側では高速道路と松林が見え、多少の起伏はあるものの一直線に見える高速道路本線と、インターチェンジの緩やかなカーブが印象的で、緑とグレーのコントラストが見事に調和しています。また、車の騒音はほとんど聞こえず、高速道路に隣接しているとは思えないほどの静寂感が醸し出されています。北側には旧八日市市の市街地が見え、東側には遠くに鈴鹿山系が見える広大な平野を見わたせます。

新病棟は教育施設としても、非常に使用しやすい機能的な構造になっています。各フロアーには2～3のカンファレンス室が設けられており、5階と6階のカンファレンス室には各々 50インチモニターを2台ずつ壁に設置し、大きな画面で電子カルテを見ながらカンファレンスが行えるように環境が整備されています。5月以降の学生実習は新病棟で行っていますが、新病棟での実習を体験した学生からは高い評価を得ています。

南病棟2階にある200名収容可能な会議室は、通常は2室に分割して使用しています。遮音機能が優れた移動隔壁を使用しているので、マイクを使用していても隣室の音は全く聞こえず、快適な環境になっています。

すべての手術室には50インチの大型モニターが壁面に設置されており、①電子カルテの情報 ②画像情報（放射線画像・超音波画像など） ③術野画像 ④内視鏡画像など 自由に閲覧可能な環境になっています。拡大された映像情報は、詳細な情報を共有できるので医療スタッフはもちろん学生実習においても非常に有用なアイテムの一つになっています。また、この映像は録画可能になっており、必要に応じて画像の保存を行っています。さらに、医局の談話室には、手術室のライブ映像が自由に視聴できるようになっており、手術の進行状況を関係者が共有できるようにしています。

外来部門の整備

外来部門は現在改修中で、旧病棟を仮設外来として利用しています。このため新旧両施設が混在しており、平成と昭和を行き来しているタイムマシンに乗っているような錯覚に陥ります。外来患者数が大幅に増加し、また改修中のために診察室の移動が多く、行き先案内を詳細に掲示しているにもかかわらず、受付と待合室は非常に込み合っています。本年12月には、外来改修が終了し、すべての診療科が新しい環境で診療できるようになれば解消すると思われます。

外来患者さんの大半は車で通院されるため午前中は駐車スペースの不足が目立ち大きな問題となってきています。隣接する休日診療所の駐車スペースも借用し、警備員を3人雇用して対応しています。旧病棟の撤去が来年5月になっており、撤去後の跡地にさらに50台の駐車スペースを確保する予定です。

電子カルテの導入

病棟のみでなくカルテも刷新することになり、今までの古い病棟・紙カルテの時代と決別し、最新設備を有する新病棟と電子カルテの導入を進めています。紙カルテから段階的な電子化を経ず、いきなり電子カルテに移行するため、大混乱が危惧されましたが、多少の混乱はあるものの、大きな障害が発生することもなく順調に導入できているように見受けられます。電子カルテの性能は限界があるため、運用でカバーするように職員に呼びかけていたことが幸いしたようです。また、医師は大半が大学での電子カルテの使用経験があるため、機能面での不便さに戸惑いはあるものの、うまく使いこなせているようです。電子カルテは医局の談話室からも閲覧できるように3台の端末を設置し、常時使用可能な状況にしています。これによって、新病棟の建設により空間として拡大された医療の動線を時間的に短縮することが可能になりました。

検査部門の整備

検査部門は検査室の移転と機器の更新とが同時となったため、検査法の変更に伴う基準値の修正および旧システムからのデータ転送や検査データの照会方法の変更などがあり、一時的に業務量が倍増しました。さらに電子カルテの導入もあって、検査依頼や閲覧方法の対応に難渋することもありましたが、概ね円滑に移行できたと思われます。

以上のようにハード面での取り組みとして、新棟の建設・外来棟の改修・検査機器の更新・電子カルテの導入などが順調に進んでおり、滋賀医科大学の第2教育病院として整備が進んでいます。

教育環境の整備

教育関連の整備を紹介いたします。東近江総合医療センターには、医育機関としての機能を発揮できるよう、本学の総合外科学講座・総合内科学講座が設置されています。メンバーは、学内スタッフとして、教授2名・准教授3名・講師3名・助教2名、学外スタッフとして、臨床教授1名・客員准教授2名・非常勤講師17名・客員助手6名で構成されています。

●【教授2名】来見良誠（副院長・消化器外科）、辻川知之（副院長・消化器内科）、●【准教授3名】杉本俊郎（医長・腎臓内科）、大西正人（医長・循環器内科）五月女隆男（医長・救急科）●【講師

総合外科学講座

	外科	整形外科	呼吸器外科	麻酔科	産科婦人科	歯科口腔外科	皮膚科	眼科	検査科
教授	副院長 来見良誠		院長 井上修平 *1						
准教授				麻酔科医長 藤野能久 *2					
講師	医長 岡内　博	医長 菊地克久							
	医長 瀬戸山 博*3		医長 尾﨑良智*3		医長 井上貴至*3	堤泰彦*3	医長 鵜飼佳子*3	須賀美保子*3	検査科長 長谷川正人*3
	医長 北村直美*3		医長 北村将司*3				内山慶一*3		
助教		リハビリ科医長 安藤厚生							
助手	長澤芳信*4		上田桂子*4		三ツ浪真紀子*4	古川康平*4			

（*1 臨床教授、 *2 客員准教授、 *3 非常勤講師、 *4 客員助手）

3名】菊地克久（医長・整形外科）、岡内　博（医長・外科）前野恭宏（医長・糖尿病内科）●【助教2名】和田　広（医長・呼吸器内科）、安藤厚生（医長・整形外科）
●【臨床教授1名】井上修平（院長・呼吸器外科）●【客員准教授2名】前田憲吾（内科部長・神経内科）、藤野能久（医長・麻酔科）●【非常勤講師17名】居出健司（医長・放射線科）、田中政幸（医長・小児科）、赤堀史絵（医長・小児科）、木下典子（小児科）、出原　亮（神経内科）、田中妥典（医長・循環器内科）、藤井　誠（消化器内科）、長谷川正人（検査科長・外科）、瀬戸山博（医長・外科）、北村直美（医長・外科）、尾崎良智（医長・呼吸器外科）、北村将司（医長・呼吸器外科）、井上貴至（医長・産婦人科）、堤泰彦（歯科口腔外科）、鵜飼佳子（医長・皮膚科）、内山慶一（皮膚科）、須賀美保子（眼科）●【客員助手6名】酒井滋企（消化器内科）、水田寛郎（消化器内科）、長澤芳信（外科）、上田桂子（呼吸器外科）、三ッ浪真紀子（産婦人科）、古川康平（歯科口腔外科）

以上の36名で病棟（320床）と外来診療を担当し、臨床実習（毎日5名・通年）と年間数名の臨床研修医の教育を行っています。

滋賀医科大学の分院としての機能をさらに充実させるためには、各診療科の医師の更なる増員が必要ですが、外科系診療科においては麻酔科の充実が最重要課題となっています。滋賀医科大学医学部の第2教育病院は、附属病院本院の次に充実させるべき病院であることを関係者にご理解頂きたいと思っています。

研修環境の充実

年間3,000症例の新入院の実績を達成し、2014年度より管理型臨床研修指定病院として臨床研修医の受け入れが可能になりました。今年度は年間新入院数4,000症例を目指しています。研修医の受け入れも可能になり、マッチングは来年度より参加する予定です。滋賀医科大学医学部附属病院との協力型研修施設としては、現在までに延べ約8名の研修医が初期研修を行っていますが、今年度の研修の満足度は非常に高くなっているようです。

これまでの医局部分と検査部門を移設し、研修医の宿泊施設を病院内に設置するために、現在工事を行っています。各部屋にシャワールームを持つ20の個室が年内に完成し、最大20名の研修医の受け入れが可能になります。

地域の医療者のスキルアップをめざし、東近

	総合内科学講座								
	内科	消化器内科	循環器内科	呼吸器内科	糖尿病内科	神経内科	救急科	小児科	放射線科
教授		副院長 辻川知之							
准教授	内科医長 杉本俊郎		医長 大西正人			内科部長 前田憲吾*2	医長 五月女隆男		
講師					医長 前野恭宏				
		藤井 誠*3	医長 田中妥典*3			出原　亮*3		医長 田中政幸*3	医長 居出健司*3
								医長 赤堀史絵*3	
								木下典子*3	
助教				医長 和田 広					
助手		酒井滋企*4							
		水田寛郎*4							

（ *1 臨床教授、 *2 客員准教授、 *3 非常勤講師、 *4 客員助手 ）

江総合医療センターにスキルスラボを開設します。従来の手術室を改装し、オープン形式のスキルスラボとし、地域の医療関係者は自由に使用できるように環境を整えています。トレーナーやシミュレータは現在機種を選定中ですが、学生実習、臨床研修、さらに医療者の生涯学習にも応用できる機材を整える予定です。

麻酔科医師の増員が急務

手術件数の大幅な増加に伴う麻酔科医師の不足は第2教育病院の今後に大きな影響を与えると思われます。滋賀医科大学麻酔学講座には多大なお世話になっていますが、教育機関である本センターで、年間手術件数が2年間で3倍に増加したにもかかわらず、常勤医師が1名では対応に限界が見えてきています。大学の執行部には是非この状況を把握いただき、適切な対応をお願いいたします。滋賀医科大学医学部医学科の外科系部門の教育・研修に不可欠な麻酔科医師の確保にご協力いただきますよう、宜しくお願いいたします。

東近江総合医療センターは、平成24年4月よりがん診療連携拠点病院である滋賀医科大学医学部附属病院の支援病院となりました。この2年間で120床から320床に増床することにより、診療内容も徐々に変わってきています。悪性疾患の増加に伴い手術・がん化学療法などの診療が増加し、支援病院としての業務が急増しています。職員の増員が不十分な状況での整備は想像以上に厳しいのですが、徐々に整備を進めている状況です。

最後に

ソフト面・ハード面ともに充実してきた当センターでは、中核病院としての急性期医療をはじめ救急医療の充実を図るとともに、良質な医師の育成をめざし、各科縦割りの実習・研修ではなく、横断的、総合的な診療および教育・研修を行っていく所存です。

当センターが滋賀医科大学医学部第2教育病院として十分に機能できるよう、引き続き多大なご支援を宜しくお願い致します。

東近江総合医療センター外科の紹介

滋賀医科大学
総合外科学講座　講師
(東近江総合医療センター　外科医長)
岡　内　　博
(医学科16期生・平成8年卒)

かつて私は、平成12年春より短期間ではありますが、当院が国立八日市病院であった頃に研修医として勤務していました。当時は診療科目も少なく、麻酔科不在であったため自科麻酔で手術を行っていたことを覚えています。時は流れ、平成24年秋より縁あって再度赴任することになりましたが、当院は東近江医療圏の中核病院として生まれ変わろうとしている最中でした。詳細は他稿に譲りますが、診療科目も増え、平成25年4月には新病棟も完成し320床に増床され、10月からは電子カルテも導入されました。それに伴い患者数も増えつつあります。

そして、消化器外科・乳腺外科・一般外科の診療を担当している東近江総合医療センター外科の症例数も、消化器内科が開設された平成22年4月以降急増しています。胃癌・大腸癌・乳癌などの悪性疾患のほかに胆石症・鼠径ヘルニアなどの良性疾患に対して、週6例の定期手術を行い、さらに急性腹膜炎・腸閉塞・急性虫垂炎・外傷などの緊急手術にも対応しています。新しい手術室になりハード面が充実したことにより腹腔鏡手術も積極的に取り組んでいます。

当院は滋賀医大の第2教育病院としての役割もあり、平成24年4月からは研修医および、学生実習の受け入れを行っております。私の属する

一般外科・消化器外科に関しては、まず実践してもらうことを重要視し、我々の指導のもとに、研修医には急性虫垂炎、鼠径ヘルニアの執刀から始まり、腹腔鏡下手術・開腹手術などでは第2助手からはじめ、スキルに応じて術式の一部もしくは全部を行ってもらいます。また、学生にも見学だけでなく、急性虫垂炎、鼠径ヘルニアの第2助手や、腹腔鏡下胆嚢摘出術では助手として胆嚢把持やカメラ操作をしてもらうこともあります。手術以外にも研修医や学生に、トレーニングボックスによる腹腔鏡手術の鉗子操作や縫合結紮のトレーニング等も経験してもらっています。このような経験をとおして自らのスキルによって医療に携わることの喜びを感じてもらえれば幸いと思っています。

今まさに飛躍しようとしている東近江総合医療センター、卒業生が中心となってこの新たな病院（滋賀医大第2附属病院）の整備を行っています。我々はあなたの力を必要としています。

東近江総合医療センターでの研修

前期研修医
加　藤　寿　一
（医学科32期生・平成24年卒）

はじめまして、研修医2年目の加藤です。去る8月から2ヶ月間、東近江総合医療センターの消化器内科で研修させていただきました。内視鏡の勉強をさせてもらおうと寄せてもらったのですが、それだけにとどまらず、様々なことを学ばせていただきました。少しばかり研修の紹介をさせていただきます。

まず朝のカンファレンスが症例を学ぶ良い機会でした。前日の当直医が救急症例のプレゼンテーションをしたり、相談症例の検討をしたりするのですが、互いに活発な議論がなされます。上の先生方が自分の専門分野以外のことに関して、積極的に他分野の先生の意見を求め、また自分の専門知識を示している姿が印象的でした。各科の垣根は低く、困ったことはすぐに相談できる環境は素晴らしいと感じました。

内視鏡の勉強をする環境としても大変優れた施設です。最新鋭のカメラが配備されており、また、検査や治療の件数も多いです。私はこの2ヶ月間で上部内視鏡検査を数多く体験させていただき、手技的なこともかなり勉強させていただきました。

救急当直にもおよそ週1回のペースで入っていました。当直は志願制ですが、臨床医を目指すのであれば、必ず当直はすべきだと考えます。なぜなら、患者さんを入院させ、治療し、退院させる、という一連の過程の入り口を経験できるからです。診断に難渋したり、所見を取るのに苦労したり、なかなかうまくやれたと感じることは少なかったですが、自分が救急外来で診た患者さんを引き続き病棟で担当することは、疾患を勉強する上で非常に有効であると実感しました。

そして、病院での肩書きは研修医ではなく「医師」です。大学病院より自分の裁量は大きくなる一方、責任も重くなります。何より患者さんに対し、「自分は研修医なので…」と言い訳じみたこ

とも言えません。治療に際し、やりがいを感じるとともに、緊張感も強く感じました。

振り返ってみると、かなり忙しく、充実した日々でした。市中病院はのんびりしている、と勝手に思い込んでいたせいもあるかもしれませんが、中々にハードでした。しかし、得られたものもまた大きいと感じています。

最後になりましたが、私を快く受け入れていただきました辻川先生をはじめ消化器内科の先生方、内視鏡センターのスタッフの皆さまに厚く御礼申し上げます。また、気さくに相談に乗っていただいた内科の先生方、掲載の機会を与えていただきました来見先生をはじめ外科の先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

臨床実習の感想

医学科第5学年
勝　部　志　郎

私は東近江総合医療センターで、臨床実習を2週間体験しました。

まず、当院の簡単な紹介をしたいと思います。当院は車だと滋賀医大から東に向かって高速道路で30分ほど、八日市のインター近くに位置する二次救急指定の総合病院です。当院は現在、崩壊していた東近江市一帯の地域医療を再生させる使命を担っています。病院の建物や設備は新しくなりつつあり、南病棟がすでに新しく建てられていましたので、新病棟や新手術室を見学できました。

また、このときは紙カルテでしたが、まもなく電子カルテが導入されるとのことでした。臨床実習では毎日別々の科を回ります。疾患はいわゆるCommon Diseaseが主で、地域的な特色もあります。例えば、皮膚科を回ったとき、ムカデに刺された症例を見学しました。私が臨床実習で担当した発表症例は「不明熱」でしたが、診断がついていない症例も珍しくはありません。入院患者さんは大学病院より10歳ほど高齢の患者さんが多いとのことでした。このように疾患や患者さんも大学病院とは多少異なっています。

次に、この実習で感じられる教育の特色について述べたいと思います。一つは総合医を育成する仕組みがあることです。そのために、診療科の垣根が低くなっています。例えば、朝のカンファレンスは診療科ごとではなく、合同で行われ、各科の先生が活発に発言されています。また、腎臓内科医の先生が外来で循環器の疾患も診療されるといったように、内科ははっきりと専門科に分かれていません。そして、別の科に気軽にコンサルトしやすい雰囲気があります。この病院では「専門医が総合医を育てる」ようになっているそうです。

もう一つ私が感じた教育の特色は、積極的に臨床実習に取り組めば、指導医の先生が必ず応えてくださるということです。臨床実習では当直の見学は必須とはなっていませんが、私は希望して内科系の当直を見学させていただきました。このときは当直の先生にお伴させていただき、食中毒や気管支喘息などの症例を見学しました。当直の見学をしたことが無かったので、貴重な体験となりました。

東近江での臨床実習では、大学病院での臨床実習では得られない体験ができます。そこで、より実習を充実させるためにも、積極的な関わり方をお勧めしたいと思います。東近江での臨床実習をぜひ楽しんでみてください。

インフォメーション

平成25年度第1回学位授与式

■課程博士　5名

■論文博士　4名

■修士　1名

平成25年度滋賀医科大学医学部医学科第2年次後期学士編入学並びに平成25年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式

去る10月1日（火）10時から、本学管理棟大会議室において挙行されました。

告　　辞

学長　馬　場　忠　雄

本日、平成25年度滋賀医科大学医学科第二年次後期学士編入学および秋季大学院医学研究科入学宣誓式を挙行できますことは、本学教職員と在学生にとって大きな喜びであります。

学士編入学の17名の皆様、滋賀医科大学入学おめでとうございます。本日のよき日を迎えられたのは、今までの経験を医学の道に生かし、医学研究や医療において大いに活躍したいという「高い志」をもって、不断の努力を重ねてこられた結果であります。そして、その「高い志」を理解し、経済的にも精神的にもサポートされた御家族はじめ関係各位の励ましと協力の賜物と思います。改めて皆様方に感謝し、それに報いるべく、本学において「高い志」を達成するため一層自分自身を磨いてください。

本学は、1974年10月1日に創立され、今年で40年目となります。現在まで医学科卒業生は3,209名を数え、その内1,094名、約34％が本県の医療に従事する一方、卒業生の46名が国公私立大学の教授として教育研究に、また専門領域の学会においても多くの者が活躍し、地域やわが国の医療に貢献しています。学士編入学の目的は、他分野で学んだ知識や技術、あるいは社会人としての経験を医学・医療の場で生かし、医学・医療の発展に寄与することであります。入学者は、大学卒以上の学歴の持ち主で、その道においても活躍が期待された方ばかりで、この優秀な人たちが「人」に魅せられ、本学において、生命の営みに対して、今までの知識や技を生かし、形態から機能、あるいは基礎から臨床に至る領域で、新しい息吹を吹き込むことに期待をしています。

本学の教授をお勤めいただいた中川米造先生の著書、「医療の原点」（岩波書店　1996年）から一部を引用しますと、「医療という行為では、医療にあたる者も医療を受ける者もともに人間である。したがって、医療は、病む者と癒す者との間の人間関係の一つの形態である。人間関係である以上、それは知識にとどまるものではないから、それを科学で捉えることはできない。勿論、医療には知識が無用というわけではない。それをもつことは、実戦的に役立つのは確かである。近代的な意味でのサイエンスは、客観性にこだわることが、人間理解にとって基本的な主観性や主体性を無視するから、部分的にはともかく、全面的な医療の基礎とすることはできない。客観的一般原則をうることを理由に、人間に科学の方法である実験を適用することは原則的には禁じられるべきであり、被験者のインフォームドコンセプトがえられる場合にのみ、例外的に許されると考えなければならない。」など、医療には科学として捉えきれない不確実性の部分があるのは、対象が人間であるからであり、個体性、人と人や社会環境との相互性、時間性、自らの意味などが重要であると述べています。

本学の医学教育は、「地域基盤型教育（Society-based Education）」であり、地域のボランティアの方々に、生活面から教育や診療に至るまで幅広く関与し、支援いただいております。生命に対する倫理感（Ethics）を養うことを基本とし、4学年のカリキュラムにも「医の倫理」を入れています。一般社会の人々の目線で医学・医療を感じとることを身につけて下さい。勿論、医学・医療に求められる知識（Science）と技能（Arts）の基本を教授します。

ところで今、ご承知のように地域医療の再構

築に対応して、滋賀県は奨学金を貸与する地域枠を設けています。学士編入学では、2名を用意していますので、これらを活用していただければ幸いです。平成22年4月には、国立病院機構東近江総合医療センターに「総合内科学講座」と「総合外科学講座」を開講し、学生や研修医の総合医としての教育の場としています。

診療に携わるにしても、研究の道に進んでも医学・医療の世界は大変厳しいものがあります。診療においては、患者が主体で7時間45分の労働時間で済むものではなく、日夜勤務時間にとらわれない状況です。医学部を目指された原点は、高収入、高い地位、安定した職業ということではなく、病に悩む人に対して少しでも手をさしのべ、役に立ちたいという「高い志」であると思います。苦しい、厳しい状況におかれても課題を真正面から受け止め、100%努力することで、自分自身が心から満足できる達成感が得られるものと確信します。

初心を忘れることなく、「高い志」を持ち続け、信頼される医療人として本学で成長され、地域にあるいは世界にその成果を還元してくれることを祈念しています。

平成25年度秋季大学院医学研究科博士課程入学者6名、修士課程入学者2名の皆様、ご入学誠におめでとうございます。平成22年度から大学院に、秋入学を導入しています。優秀な外国からの入学者を迎えるためでもあり、今年も留学生は、2名が入学しました。国際化は秋入学制度ではなく、大学院教育における英語による講義や演習など留学生に対応した実質化が求められています。現在カリキュラムも共通部分は約50%を英語で行っています。

大学院の使命は、独創的な研究の芽をつかみ、それを伸ばすことであります。研究は、絶えずtry and errorで、高い壁に立ち向かってそれを乗り越えてはじめて独創的な成果が得られます。ノーベル賞受賞者の益川敏英先生と山中伸弥先生の対談をみると、益川先生は、「考えることは、感動することだ」といっています。一つの事象について考え抜くことが大切であり、その結果として感動する発見があるといっています。自分でやった実験の結果を見て「うわー、すごい」と面白がる人じゃないと研究を続けてゆくことは難しいと思う。山中先生は、犬の実験で血圧が下がらないはずのものが、血圧がどんどん下がったので、面白いことが起こったといって、興奮した、そしてその機序を解明して、Circulation Researchに掲載したとのことです。実験で起こるべくして起こったことより、起らなかったことに対して何故かを問い続け、本質を見出したとき大きな感動があったと述べています。科学者にとって感受性は大切だと思います。諸君も、これから始まる研究生活において考え、そして感受性を大切にし、本質に迫る成果を出す努力を重ねて下さい。

研究に際しては、「温故知新」を忘れずに、自分の研究分野の文献を詳しく調べ、得られた実験データについて、指導者や同僚との議論を経て、さらに自分の工夫を加え、新しい知見をつけ加え、少しでも医療の道に生かせる努力をして下さい。

大学では、自由な発想のもとに研究活動は可能ですが、研究者は、生み出される知の正確さや正当性、さらに倫理性の上に科学の自立性が成り立っていることを自覚し、責任ある行動、すなわち、法令遵守（コンプライアンス）を求められています。

滋賀県は日本の中央に位置し、人口増加県であり、琵琶湖を囲んで自然環境に恵まれ、東京、京都、奈良に次いで名所旧跡も多く存在しています。勉強や研究の合間に訪れて、楽しい充実した学生生活をエンジョイして下さい。

以上、告辞といたします。

平成25年10月1日

後期学士編入学

■後期学士編入学　17名

平成25年度秋季入学者

■博士課程入学　6名

■修士課程入学　2名

第39回　解剖体慰霊式

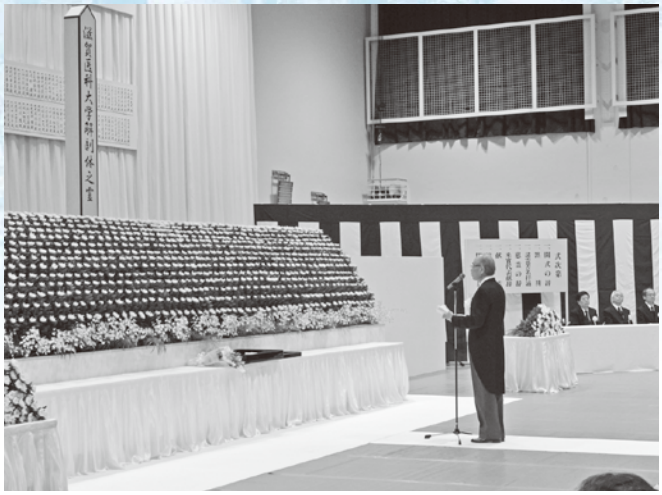
去る10月24日（木）午前10時から本学体育館において、ご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員及び教職員・学生約600名の参列の中、厳かに第39回滋賀医科大学解剖体慰霊式を執り行いました。

このたびは、系統解剖44霊、病理解剖21霊、法医解剖144霊、計209霊を新たにお祀りし御霊のご冥福をお祈りしました。

慰霊式は、出席者全員で御霊に黙祷を捧げ、諸霊芳名拝誦、馬場学長及び学生代表による慰霊の辞、高橋しゃくなげ会理事長の献辞、出席者全員による献花が行われました。

最後に、ご遺族代表のご挨拶及び、本学教授代表として解剖学講座の宇田川教授から挨拶があり、厳かな内に閉式となりました。

会場の様子


馬場学長による慰霊の辞

学生代表による慰霊の辞

出席者全員による献花が行われました

第３回男女共同参画推進のための講演会

10月27日（日）、埋め込み型人工心臓の開発に携わってこられ、また、心臓外科医としても活躍されたテルモ株式会社 常任理事　野尻　知里　先生をお迎えし、若鮎祭実行委員会との共催により、第3回男女共同参画推進のための講演会を開催しました。

「私の履歴書～ある女性心臓外科医の半生～」をテーマにご講演いただきましたが、その内容は、埋め込み型人工心臓の開発の歴史及びその市場参入に関することから始まり、心臓外科及び人工心臓ビジネスの女性キャリアになるまでの経緯、日本における男女共同参画の重要性、そして豊富な経験から築き上げてこられた価値観まで多岐にわたり、女性医師、女性研究者、または女性キャリアのロールモデルとして来場者にうったえかけるものでした。講演の最後には、「前例がなければ、自分が作ればよい」と会場に詰めかけた学生諸君にエールが送られました。

講演後、学内のみならず、学外の女子学生や男性の参加者からも質問が寄せられ、ユーモアも交えつつ的確な回答をいただき、盛況のうちに閉会しました。

野尻先生による講演

質疑応答の様子

平成25年度　研究動物慰霊式

10月29日（火）午後3時から、滋賀医科大学研究動物慰霊碑前において平成25年度研究動物慰霊式を執り行いました。

慰霊式には、学長、副学長をはじめ112名が出席し黙祷を行った後、動物生命科学研究センター長の服部副学長、利用者会議議長の相見良成准教授より慰霊の辞が述べられました。

その後、出席者全員による献花が行われ、過去1年間（平成24年10月～平成25年9月）に実験に供された動物の御霊の冥福を祈りました。

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
勢多だより
DECEMBER 20, 2013

編 集 後 記

先日高台寺の臥龍池に映る紅葉をみました。ともすると本体よりも色鮮やかな水鏡を見ながら、皆さんが大学生活で経験されるひとつひとつの出来事も後に思い起こし表象することにより、出来事の持つ意味がよりくっきりと皆さんの心に刻み込まれるのではないかと、そのようなことを考えました。

編集委員長　宮松　直美

(勢多だよりの由来)

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢（いきおい）が多い」という佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の想いにぴったりということで、瀬田とせずに、あえて勢多とした。

（題字は、故 脇坂行一初代学長による）

勢多だより　No. 97
発行年月日：平成25年12月20日
編集：「勢多だより」編集担当者会議
発行：滋賀医科大学広報委員会

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。「中心に向かって、外からさざ波の波動ーこれは人々の医への期待である。外に向かって中心から一隅を照らす光の波動ーこれは人々の期待に返す答えである。」